『人文学報』第116号（2021年３月）
（京都大学人文科学研究所）

# 青年の理想主義について

## ―― 映画『若者たち』とポスト高度成長期のサークル文化運動 ――

花　田　史　彦*

## 1. は　じ　め　に

### 1-1　問題の所在

本論文の目的は，「山本明コレクション」（京都大学人文科学研究所所蔵）のうち，とくに映画『若者たち』（森川時久監督，1968年公開）に関係する資料を取り上げ，ポスト高度成長期[1]における映画サークル運動の一断面を明らかにすることである。

「山本明コレクション」の主・山本明（1911-77年）は，戦前の早稲田大学在学中から左翼文化運動を担った人物である。日本プロレタリア演劇同盟に参加して以来，東京から大阪へと拠点を変え，職を転々としながら生涯を運動に捧げた。山本の戦後の活動歴については，彼の死に際して知人の手で以下のようにまとめられている。

> 〔山本は〕民主主義文化団体連盟事務局で活躍され，昭和二十一年六月九日，大阪地方支部書記長代理の重責をになっておられます。そして，昭和二十一年一月十五日，日本共産党に入党されました。／その後，昭和二十三年労働組合映画協議会結成に参加し，委員長として活動され，昭和二十四年九月八日，全大阪映画サークル協議会の初代委員長に就任以来，今年〔1977年〕四月二十日急逝されるまで二十八年間，委員長としての要職を果たしてこられ日本の民主的文化運動，とりわけ映画運動には多大の功績を残してこられています。また，葬儀には映画監督の山本薩夫さんも参列くださいました。[2]

この記述から分かるとおり，本論文で扱う『若者たち』関係資料を山本が収集・保存していたのは，彼が全大阪映画サークル協議会（以下，大阪映サ協）[3]の委員長という立場だった時期

* はなだ　ふみひこ　京都大学大学院教育学研究科

にあたる。

「山本明コレクション」には数多くの映画関係資料が収められているが，ひとつの作品でまとまった数の資料ということになると，『若者たち』が際立っている[4)]。しかも，サークルの常任委員会の案内状といった内部文書から，機関紙，上映会で配布されたプレスシート，新聞記事の切り抜きまで，ひとつの作品の流通過程や反響を把握できる資料がひととおり揃っていると言ってよい。

以下それらの資料にもとづき，具体的に『若者たち』はいかに上映され，またいかに観られたかということを考えていきたい。

### 1-2　先行研究の検討と本論文の視座

戦後のサークル文化運動研究は，2000 年代以降，現在に至るまで盛んに行なわれてきた[5)]。成田龍一によれば，「〔戦後の〕サークル運動は演劇と詩から出発し，映画と音楽がやや遅れて始まり，そのほかに版画などの「職場美術」のサークルの活動もあった」[6)] という。つまり映画は，サークル運動にとって重要な媒体のひとつであったが，それにもかかわらず，現在のところサークル運動研究において映画に焦点が当たることは少ない[7)]。

そのような状況のなか，佐藤洋による映画サークル論を本論文の先行研究として挙げることができる。

佐藤は，主に東京に軸足を置くかたちで 1950 年代から 60 年代における映画サークル運動の全国的な見取り図を描いた。佐藤によれば，1950 年代の映画サークルは独立プロダクションに主体的な献身をすることによって作品内容に影響を与えたというような組織ではなく，あくまでも独立プロのために宣伝・団体動員を行なう存在だった。また一方で，そうした政治主義的な動きに利用されることへの違和感も胚胎しており，やがて「意識的に独立プロ一辺倒の支援体制から，相対的な自律性を保とう」[8)] とし「政治といかに距離をとって自主的な活動を確立するかを模索していた」[9)]。

そしてその模索の過程で生まれたのが，「自主上映による映画の制度的変革と，批評形態の革新による観客の文化意識の変革」[10)] だった。しかし 1960 年代に入り，映画サークル運動は前者の「自主上映による映画の制度的変革」の方向に収斂していき，かつ「アメリカや日本の独占的な映画資本との闘争といった政治的な目的へと組織目標が変質」し，「普遍的な映画への欲望からは遠くはなれ，一九五〇年代の映画サークル運動が距離を置こうと苦心した政治性に再び接近してしまった」という[11)]。

たしかに，『若者たち』上映運動が「政治性」を帯びていたことは間違いない。そのことは，先に引用した山本明の略歴において日本共産党との関係が明記されていることからもうかがえるし，後述するように，『若者たち』上映運動を 1950 年代の独立プロ運動の延長線上に位置づ

ける左派の言説も存在していた。

しかし同時に，『若者たち』上映運動の分析にあたっては，「狭義の政治や，政局の動向に単純に還元しない」[12] ことも必要である。この作品は広く社会に流通し，多様な受け手と評価を得ていったからだ。

また『若者たち』という作品の上映運動を追いかけることで，大手映画会社がテレビとの差異化のために選択した過激なヤクザ映画路線やポルノ映画路線[13]とも，また ATG のような芸術路線とも異なる映画史の道筋を見出すこともできるだろう[14]。

そこで以下本論文では，第 2 節「映画『若者たち』と大阪映画サークル協議会」において自主上映に至るまでのサークルの動向について，第 3 節「映画『若者たち』の流通と受容」において上映後の反響について，主に「山本明コレクション」の資料にもとづき考察していく。

## 2. 映画『若者たち』と全大阪映画サークル協議会

### 2-1　前史

『若者たち』はもともとテレビドラマから出発した作品であった。映画版のプロデューサーだった佐藤正之（1918-96 年）の回想によると，ドラマの概要は以下のとおりである。

> この映画は，一九六六年から六七年にかけてフジテレビで製作放送された連続ドラマ「若者たち」の映画化です。物語は両親のない五人兄弟が，受験，就職，友情，恋愛，結婚といったそれぞれの青春に全力でぶつかっていく話。脚本は山内久を中心に立原りゅう，早坂暁，清水邦夫，大野靖子その他の各氏。演出は森川時久他。プロデューサーはフジ側白川文造，俳優座松木征二。五人兄弟には当時の俳優座若手組の田中邦衛，橋本功，山本圭，佐藤オリエ，松山省二が演じました。[15]

テレビドラマ『若者たち』は，両親のいない家庭で暮らす性格も学歴も異なる 5 人兄妹が「絶えず大声で正しい生き方を論じ合」[16] う内容で，「ディスカッションドラマ」[17] とも呼ばれるユニークな作品であった。ただ「暗くて娯楽性に乏しい内容」ということで，26 回で打ち切りの危機に瀕した後[18]，継続を望む視聴者の声が局に多数寄せられたこともあり放映はつづくことになったが，そもそも連続ドラマ製作の現場は非常に無理のあるスケジュールで動いていたため，スタッフや俳優の側が「限界」ということになり，39 回で打ち切られた[19]。

しかし，やはり『若者たち』へのファンの声援は止まず，俳優座に勤務していた佐藤に新星映画社の松丸青史が映画化の話を持ちかけ，俳優座と新星映画社との共同製作ということになった[20]。

映画化にあたっては，主な製作スタッフや出演者もそのまま引き継がれた。ドラマ版の演出を務めた森川時久（1929-）が監督となり，同様に脚本は山内久（1925-2015 年）が担当した。また主演の 5 人もドラマ版と同じである。新たに加わったスタッフには，『どっこい生きてる』（今井正監督，1951 年公開）など，1950 年代の独立プロ作品で数多くの仕事をしてきたカメラマンの宮島義勇（1910-98 年）がいる[21]。

このように，映画『若者たち』はテレビ出身のスタッフと独立プロ運動出身のスタッフとが合流するかたちで製作され，1967 年 3 月に完成した。しかし，同作のフィルムを買い取る映画会社がなく，自主上映という興行形態を余儀なくされる。そこで独立プロ作品の上映を手がける映画館を頼り，名古屋，東京という大都市で立て続けにヒットを飛ばし[22]，大阪でも上映の運びとなった。

なお，山本明はすでにドラマ版の段階から『若者たち』の動向を確認していたようで，「山本明コレクション」には同作を取り上げた『赤旗』の新聞記事の切り抜きが残されている[23]。

### 2-2　大阪での普及活動

1967 年，『若者たち』映画化の流れを受け，大阪映サ協も動き出していた。「山本明コレクション」に残された資料からは，その過程を追うことができる。

「全大阪映画サークル協議会　委員長　山本明」の署名が入った 1967 年 10 月 11 日の大阪映サ協の「第 24 回常任委員会案内」を見ると，10 月 18 日に予定されている委員会の「ぎだい」として「「若者たち」「ドレイ工場」の普及運動について」が挙がっている[24]。ちなみに『ドレイ工場』（山本薩夫・武田敦監督，1968 年公開）は，実際にあった労働争議を映画化した独立プロ作品である。

おそらくこの委員会での議論に進展があったのだろう，つづく 10 月 27 日予定の「第 25 回（臨時）常任委員会案内」ではやはり「ぎだい」として「「若者たち」「ドレイ工場」の普及運動について」が挙げられ，さらに以下のように具体的なスケジュールが設定された。

> 「若者たち」の有料試写会を 12 月 3 日（日）と 4 日（月）の両日，新朝日ビルホールで開催します。これら来春 2 月ロードショウ公開をめざす普及活動家の結集のために行うもので，本番の 2 月公開を成功させるうえに決定的な位置を占めています。従ってこの対称（ママ）の選択は，1“独立プロ名画祭”につながる日本映画復興のアピールに呼応する人々への働きかけ，と，2 この作品内容が求める，この作品にふさわしい観客への働きかけ，の 2 点に於て追究します。／1 は，いうまでもなくわが映サ会員であり，ついで独立プロ名画祭に具体的に力をかしてくれた活動家・団体です。／2 は，各種学生，とりわけ定時制の学生，勤労青年，とりわけ未組織労働者，そして母親などです。[25]

ここで『若者たち』に「ふさわしい観客」として想定されているのが，「とりわけ定時制の学生，勤労青年，とりわけ未組織労働者，そして母親」であることが目を引く。

敗戦から1960年代半ばまでの時期，戦後の民主主義教育の展開と巨大な社会的格差の存在とが相俟って，農村部の青年団や進学を断念・嫁入りさせられた女性，都市部の定時制高校生や不安定な労働環境にある中卒労働者といった，決して「エリート」とは言えない若年層のあいだにも広く「「知的なもの」への憧憬」や理不尽な社会構造に対する批判意識が共有されていた[26]。しかし1960年代後半以降，経済的格差の解消や進学率の上昇によって，そうした「大衆教養主義」は徐々に退潮していくことになるが，1967年の時点ではまだ上に述べたような意識をもった人々に手を差し伸べる行為も一定のリアリティをもっていたと考えられる。『若者たち』上映運動は，そうした教育社会史的な文脈も念頭に置いて理解する必要があるだろう[27]。

さて，予定通り，12月3，4日の2日間にわたる『若者たち』の試写会は実現した。大阪映サ協の機関紙『大阪映画サークル』第248号の第1面には，「『若者たち』試写会総括」という記事が大きく掲載された【図1】。そこには「熱烈な支持，それもハイ・ティーンから，二十歳〔代〕前半の青年層の圧倒的支持」や「超満員の盛況」といった報道のみならず，大阪映サ協が開催したと思われる「合評会」の記録，さらには主演俳優のうち山本圭と佐藤オリエのインタビューも掲載され，盛りだくさんな内容であった[28]。

この試写会の結果を受けた「第28回常任委員会・案内」（1968年1月17日予定）には，「これ〔『若者たち』普及運動〕は日本の新しい民主的映画運動の主流をなすであろう運動の第一歩として，創造にたづさわる者，配給にたづさわる者，とわれわれ観客とが連帯して全国的に展開する，かってなかった運動です」[29] とあり，山本が試写会に手応えを感じていたことが伝わってくる。

このような言説の背景には，当時の映画産業の「斜陽化」と，それにともない大手映画会社から流出した作家たちが立ち上げた独立プロの隆盛[30]，テレビ業界出身者の参入[31]といった，映画界の再編状況があった。

さらに大阪映サ協は攻勢をかけていく。1968年2月11，18日には第二次有料試写会を行ない，そして3月にはほとんどひと月を費やしてロードショーを行なった。場所は，道頓堀朝日座（3月1-14日），フェスティバルホール（21-23，27，28，30日），新朝日ビルホール（24-26日）と，大阪市中心部の著名な施設ばかりであった[32]。そして，このロードショーの結果は，3月25日の『大阪映画サークル』で「好調のロードショウ」と報じられた[33]。

こうした状況が追い風になったとみえ，その後も5月に第二次ロードショー，6月に第三次ロードショーが大阪市内で行なわれ，さらには大阪府全体へと範囲を拡大した普及活動（10，11月）へと至ることになった[34]。

このように『若者たち』は人気を博し，全国的にも「250万人から300万人の観客動員に成

(1)　NO248　大阪映画サークル　1968年1月1日

大阪映画サークル

No.248
1968年1月1日
(定期一部15円)

全大阪映画サークル協議会
大阪市北区梅田町1　オークラビル内
電話(341)3923

感想文　「若者たち」試写会総括　合評会

試写会場にあふれる
若人の熱気

大人の干渉がない対話
臆病な映画会社を非難

山本圭、佐藤オリエに聞く

新しい映画の理論化を
「普及会」へ申込み続く

「ドレイ工場」自主上映へ
現代の労働者を描く

「若者たち」
自炊生活で撮影

「若者たち」
特別有料試写会
2月11日(日)・12日(月)
中之島・フェスティバルホール
前売券　二五〇円

図1　全大阪映画サークル協議会『大阪映画サークル』第248号，全大阪映画サークル協議会，1968年1月1日，「山本明コレクション」210-01-0229

功した」[35] と発表されている。そして，続編『若者はゆく』（森川時久監督，1969年公開），『若者の旗』（森川時久監督，1970年公開）まで製作されることになった。

では，これほどの人気を博した『若者たち』はどのように語られていくことになったのかを次に確認したい。

## 3. 映画『若者たち』の流通と受容

### 3-1　プレスシートへの相乗り

『若者たち』には，多様な立場から肯定的な評価が寄せられることになった。そのことは，たとえば「山本明コレクション」に残されていたプレスシートが象徴している。

表紙には「推せん」者として文部省から教職員組合まで，数多くの組織や団体が名を連ねている【図 2】。この現象は，先に述べた当時の教育をめぐる状況とも無関係ではなかっただろう。

映画のプロたちも『若者たち』に注目していた。プレスシートのなかを見てみると，「映画によせて」という欄で，岩崎昶（1903-81 年），佐藤忠男（1930-），南部僑一郎（1904-75 年）という 3 人の著名な映画評論家によるコメントが掲載されている。それぞれの言説の棲み分けが興味深い。

図 2　映画「若者たち」全国配給上映委員会『若者たち』1967 年 10 月，「山本明コレクション」211-07-0119

岩崎昶は『若者たち』を評して以下のように述べている。

> 現代ははげしい時代である。本当に自分をのばしていけない。自分を偽らずに生きていけない時代である。この映画『若者たち』は，こういう現代に働く若者たちがはげしく闘いをいどんでいく姿を，真正面から描いている。まぎれもなく一九六七年の，この日本の現実と取組んだ純粋な独立プロの新しい青春映画である。[36)]

1950年代に盛り上がった独立プロ運動と関わった経験をもつ岩崎は，その運動史の延長線上に『若者たち』を位置づけている。また「時代」や「現代」，あるいは「日本の現実」といった，いわば社会構造との「闘い」を作品に読み込んでいる点も，いかにも戦前以来のマルキスト・岩崎の特徴と言えよう[37)]。

それに対して，戦後世代の佐藤忠男は次のように述べている。

> 「若者たち」のよさは，第一に，スゴクまじめな映画であるということだ。まじめな映画は商売にならない，などという迷信が広がっている今の日本の映画界に，あえてこう云うマジメな映画を送り出すということの意義は大きいと思う。若者たちがまじめに悩み，そして真面目にがんばる姿はすがすがしい。それは，云わば，われわれの心のふるさとのようなものだからであると思う。この映画の観客は，この映画の中に，自分と同じ人間を見出すだろう。そして，自分こそ，現代のもっともカッコいい人間であるということを悟るだろう。[38)]

佐藤は，「まじめ」や「心のふるさと」といった言葉を用いて，登場人物の内面や人間性に焦点を当てた論評を行なっている。それは，歴史や社会と人間との緊張関係を前面に押し出す岩崎の筆法とは好対照である。また，観客が「まじめ」な登場人物と自らを同一視できるように促しているのも，佐藤の言説の特徴と言えるだろう。

南部僑一郎は，「この映画の中には，あなたがそのまま，描き出されています」と述べて佐藤と同じような立場からコメントをしたうえで，次のように観客たちに呼びかけた。

> 〔『若者たち』には〕あなたの歓び，あなたの苦しみ，人生について社会に対しての考え方，賛同も，反対も，願いもはっきり示されています。みなさんで観て，論議の対象にしてください。[39)]

「人生」と「社会」，「賛同」と「反対」といった対句を用いながら，最終的には「議論の対

象にしてください」と観客の側に判断を委ねている。結果として，岩崎と佐藤の論評を南部が中和するという構成になっている。

プレスシートにコメントを寄せているだけあって，もちろん3人とも『若者たち』に対して肯定的な立場である。にもかかわらず，こうした差異を見て取ることができるのは，『若者たち』が製作者たちの意図とは別に，多様な解釈に開かれていたことを示唆している。そうした『若者たち』に固有の性格もまた，先に述べたさまざまな「推せん」者をひとつのプレスシート上に相乗りさせることができた要因だと考えられる。

### 3-2　石坂洋次郎から遠く離れて

「山本明コレクション」には，映画評論家の滝沢一（1914-93年）が『若者たち』を映画『青い山脈』（今井正監督，1949年公開）と比較した新聞記事の切り抜きも保管されており，彼は以下のように，先に述べた3人よりも詳しく『若者たち』について考察している。

> 映画にもTPOがある。今井正の「青い山脈」はすぐれた映画であるが，特にそれが製作された一九四九年という時点においてすぐれていた。男女の自由交際のあり方，集会，討論の進め方など，この作品は，そうした民主主義の諸原則の絵解きとして，その時点において，最も啓発的な意味をもっていた。映画としても明快で楽しい作品であったから，広い大衆に支持され，興行的にも成功した。／「青い山脈」は若者たちの映画であった。それから二十余年，現代の若者たちの姿を描いた映画「若者たち」が作られた。〔中略〕／ただこの映画に登場する若者たちは「青い山脈」の若者たちのように楽天的ではない。ずっしりと重い生活の荷を背負い，現代の社会や経済の仕組みのなかで，苦しみ，かつ耐えて生きる青春像のパターンが見られる。／そして，この映画のなかの五人の兄妹たちは，それぞれ自分たちが当面する恋愛，結婚，友情，職業〔,〕進学の問題などについて，激しいディスカッションを行ない，なおかつ試行錯誤をくりかえす。その討論と試行によって問題の本質を解明しようとする作品の姿勢に，この作品の現代の時点における大きな存在価値が認められる。[40]

石坂洋次郎（1900-86年）の手による小説『青い山脈』（新潮社，1947年）は，1949年に今井正監督によって映画化され，その後も4度（1957，63，75，88年）にわたってリメイクされた。「明るい戦後民主主義」を象徴する「名作」としての評価が定着するのは，1950年代後半から60年代にかけての時期である[41]。

『青い山脈』が象徴しているとされた，楽天的な理想としての民主主義から，「ずっしりと重い生活」を含み込んだ民主主義へ。そのような民主主義像の転換への志向も，『若者たち』は

仮託されることになった[42]。

### 3-3　闘争の場としての『若者たち』

ここまで述べてきたとおり，『若者たち』は多様な解釈に開かれた作品であった。それゆえに，異なる立場の組織や団体が相乗りで「推せん」するという事態も生じた。

とはいえ，もちろん党派性と無縁であったわけではない。たとえば，1968 年 2 月 10 日の『大阪映画サークル』には，『キネマ旬報』ベスト・テンを強く意識した記事が掲載された。

まずこの記事の執筆者は，『若者たち』が『キネマ旬報』ベスト・テンに入らなかったという結果[43]を「惨憺たるもの」だったとしたうえで，今村昌平（1926-2006 年）や大島渚（1932-2013 年）といった監督たちをライバル視し，さらには学生運動も意識した議論を以下のように展開している。

> 「若者たち」を，独立プロの台頭との関連の中で論じるのは，非常に重要なのだが，それでもその場合，今村昌平の「人間蒸発」や，大島渚の諸作の陰にかくれているのは，やはりわれわれにとっては不満である。「若者たち」は，今村作品や大島作品以上に大衆の皮膚感覚にピリリと訴える映画固有の魅力をそなえながら，なおかつ日本の若者映画に変革をもたらした作品として，評価したいからである。そうでなければ，こういうマジメな静かなブームが起るはずはない。〔中略〕若者の皮膚感覚を大切にしていると自認している批評家群も，「若者たち」をほうむりさる立場に立つ。その人たちがとりあげる映画は，大島渚作品でありアンダーグラウンド映画であり，さらには「圧殺の森」などの全学連映画である。確かに大島の「青春残酷物語」など初期の作品や，「日本春歌考」には，青春の一断面が，適格（ママ）にとらえられてはいたけれども，その多くは，意識過剰の若者のエリートを，満足させるだけの作品であったように思う。三派系全学連と一般学生の乖離がこれらの人たちが推す若者映画と「若者たち」の乖離でもあるわけなのである。我々は，少くとも，エリート青春映画を，抹殺しようとは思わない。しかしエリートでないからといって，エリートが，「若者たち」をほうむる権利はないはずだ。[44]

ここで言及されている『圧殺の森』（小川紳介監督，1967 年公開）とは，高崎経済大学における学生運動のドキュメンタリー映画である。同作は「監督小川紳介の名を一躍新左翼運動内外野映画界に轟かせる契機となった」[45]一方で，たとえば山田和夫（1928-2012 年）のような日本共産党系の映画評論家からは，作品に登場する学生たちの「語りの内容の空疎さ」が批判された[46]。

上に引用した記事では「エリート」とそれ以外の若者とが弁別され，『若者たち』は後者の側に立つ作品であることが肯定的に評価されている。つまり，ごく限られたエリート層ではな

く，大多数の一般的な若者の側に『若者たち』は寄り添っているというわけだ。そして，そのような内容の同作を「ほうむりさる」「批評家群」に対しては厳しい批判が展開されている[47]。

実際，六全協以降「穏健路線に転じた」日本共産党は，1960 年代に飛躍的な党勢拡大を遂げ，共産党の傘下にあって学生運動を担った日本民主青年同盟（民青）も，諸セクトの内ゲバを横目に力を伸ばしていった[48]。したがって上に引用した記事も，共産党の党勢拡大を背景としたものであっただろうし，「マジメな静かなブーム」という言葉からは，『若者たち』を一過性の流行では終わらせないという自負を見てとることもできる。

このように『若者たち』は，先に述べたとおり多様なアクターの相乗りを可能にする鵺的な作品として機能しつつ，同時に当時の政治運動における対立構造のなかに組み込まれてもいた。

### 3-4　「研究集会」と「人生教」

もちろん，『若者たち』をめぐる言説は肯定的なものばかりではなかった。

1969 年，『毎日新聞』に掲載された『若者たち』の続編『若者はゆく』に関する記事は，「この一家の各人〔主役の佐藤兄妹〕がそれぞれおかれている立場から，出かせぎ，労働者の権利闘争，学園紛争，原爆反対など今日的な問題を数多く提起し，この映画全体が“研究集会”のような形をとっている」と評価しながらも，映画に共感して涙を流す観客の様子を踏まえて以下のように述べる。

> 中学，高校出身の勤労者といえるような観客が多いだけに，この映画は自分の立場を正直にうつした“鏡”なのだろう。／それだけに人間おたがいにしっかりと手を結んでいけば，いつかは幸福になれるというテーマがより切実に訴えてくるのかもしれない。したがってその背後にある政治状況へのアプローチが涙でくもらされがちになり，“人生教”的なカタルシスムに重心が移ってしまっている。感動も大切なことにはちがいないが，それだけで終始してしまったら，逆に閉鎖的な効果しか果たさないのではないか。[49]

この記事は，作品内容と受け手の反応とを弁別することによって，『若者たち』シリーズの観客が，「研究集会」と「人生教」のどちらにも転び得るということを指摘している。そして，記事の執筆者が現実に目にした光景は，後者のほうであった。観客たちは登場人物に「共感」し，ときには涙も流すが，まさにそれゆえに彼らが置かれている政治や社会の状況について「研究集会」的に「理解」を深めていくことはできないという状態である。

この見解については，記者の深読みが過ぎるとも言い切れない。時期が前後するが，たとえば，『若者たち』試写会からほどない 1967 年 12 月 7 日に行なわれた合評会では，参加者から次のような感想が出ていたという。

これほど私たちの気持とピッタリくる映画はなかった。単に考え方に共感できるとか描かれている生活に，身近なものを感じるとかいうだけでなく，〔登場人物が〕観念的に怒号しあう。未来に向って必死に生きるかと思えば恋の感傷に浸る。生活苦に耐え，組合運動に熱中するかと思えば，バー勤めの夜の女になることもいとわない。そのほか，いつまでたっても進学か就職かの決心がつかない浪人のイライラした気持や金を軽蔑しながら金を欲しがる矛盾など描かれた対極から対極へ走る心理の起伏や感情生活の波長が，まさに若者の心のリズムにぴったりとくるんです。[50)]

「観念的に怒号しあう」ことや「組合運動」，あるいは「矛盾」といった事柄に言及しつつ，最終的に「心のリズムにぴったりくる」というところに収斂していくこの感想は，先の記者が示していた懸念とも整合的である。

したがって，3-3 で引用した『若者たち』の「マジメな静かなブーム」も決して盤石なものではなく，一過性の「カタルシスム」で終わってしまう可能性を当初から内在していたということになる。

## 4. お　わ　り　に

### 4-1　得られた知見

ここまで，「山本明コレクション」に残された資料を用いて，映画『若者たち』上映運動の過程を明らかにしてきた。『若者たち』は，テレビ局からも大手映画会社からも見放されたところからスタートし，共産党系のサークル運動として展開しながらも，政治的に異なる立場の多様な人や組織から支持され，結果としてシリーズ化されるほどの人気を博した。その背景には，人生や社会について「まじめ」に考える人々の存在があった。

1983 年，佐藤忠男は『若者たち』シリーズを受容した「大衆」の実像について，以下のような推論を述べている。

「若者たち」を支持したのは大衆のなかの主流的な部分だったとは言い難い。しかし，大衆とは呼べないほどの特殊な少数派でもなかった。量的に限られてはいるが，かなり強力な大衆の一部であったと言えるだろう。小数（ママ）の芸術映画ファンが支持したわけではなかったことは，この映画化作品が，批評家たちのベストテン投票であまり問題にされていないことで明らかである。では熱烈にこれを支持したのは大衆のなかのどういう層だったのか。簡単に言って，まじめな青年たち，ということになると思う。人生いかに生くべきか，というようなことを真剣に議論することが好きな人たち，と言い換えれば，もっと具体的に

なる。〔中略〕彼らはドラマや映画を見るとき，たんにそれを娯楽として受け止めるだけでは満足しないし，芸術的な表現の高さ低さという観点で見ることも好まない。もっと具体的に，その作品が人々の生き方に対して何を呼びかけているか，というところで受け止めようとする。[51)]

したがって，本論文の意義は，まず「山本明コレクション」という資料群を用いることで，この佐藤の慧眼に対していくばくかの裏付けを行なった，ということになるだろう。

一方，ここで佐藤がいう「まじめ」には，少なくともふたつの側面があったことも本論文では詳しく述べた。すなわち，「研究集会」的な「まじめ」さと「人生教」的な「まじめ」さである。『若者たち』受容は，政治や社会に対する関心や批判意識を含む前者の「まじめ」さと，個人の人生に共感し沈潜していく「まじめ」さとのあいだで展開していったと考えられる。

こうした人々の心性もまた，戦後の映画サークル運動を構成する条件だったのではないだろうか。逆に言えば，現在の視点からは「閉鎖的」あるいは「党派的」に見える映画サークル運動には，そのような心性をすくい上げる幅の広さがあったのではないかと思われる[52)]。

NHK の「国民的番組」として知られた《青年の主張》を分析した佐藤卓己は，1968 年における同番組について論じた箇所で，「全共闘世代とは，同時になお集団就職世代なのであ」り「数において同世代人口の圧倒的多数を代表したのは，「学生の異議申し立て」より「青年の主張」の方であ」るとしたうえで，「汗牛充棟たる全共闘運動研究に対して，《青年の主張》研究は見当たらない。このイベントの出場者が「良識ある青年」として選抜され，社会秩序を支える中堅となったからである。メディアも研究者も同世代ピラミッドのトップとボトム，つまり「有名大学の暴力学生」と「社会問題の非行少年」は社会病理として注目するが，こうした健全なミディウムに目を向けることは少ない」と述べている[53)]。「社会秩序を支える中堅」を輩出した《青年の主張》がいかなる意味で「健全なミディウム」なのかということについては議論の余地があるだろうが，いずれにしてもマジョリティの心性が具体的にどのように代表されたり表象されたりしたのかということを探っていく作業は，重要であるにもかかわらず意外と見落とされがちであることは間違いない。

『若者たち』上映運動は，《青年の主張》とは異なる角度からこの作業を可能にするものであると言える。

### 4-2　課題と展望

本論文では，『若者たち』について，1960 年代後半から 70 年代初頭までのごく限られた時期を駆け足で論じたに過ぎない。

まず，『若者たち』の続編である『若者はゆく』と『若者の旗』についてほとんど言及する

ことができなかった。今後の課題としたい。

上記の続編も加えながら『若者たち』シリーズの（再）上映運動は，1970 年代後半以降もまるで間欠泉のように何度も各地で行われていくことになる。大阪映サ協の常任委員会では，1970 年代に入ってからも継続的に『若者たち』シリーズの普及活動について議論されていたことが確認できるし[54]，たとえば 1998 年には北海道，東京，千葉，神奈川，山梨，静岡，愛知，石川，大阪，兵庫，京都，岡山，広島，福岡という 14 の都道府県で上映会が行なわれた[55]。

さらに 2014 年には同作のいわば古巣にあたるフジテレビが，舞台を現代に置き換えたテレビドラマ『若者たち 2014』も放映した。そのことも踏まえるなら，『若者たち』については少なくとも半世紀弱というスパンで考察が行なわれなくてはならないだろう。

加えて，戦後の「大衆教養主義」の一翼を担っていた文理書院[56]から出版されていたノベライズ版[57]や，流行した主題歌の存在も無視できない。『若者たち』シリーズは，じつは映像作品だけにとどまるものではない。したがって，多種多様な『若者たち』の総体的な把握が必要なのである。その先に，より多彩な戦後史の姿も見えてくるであろう。

**註**

1）　この時期区分については，天野正子『「つきあい」の戦後史 —— サークル・ネットワークの拓く地平』（吉川弘文館，2005 年）に拠っている。天野は戦後のサークル運動史を 3 つの時期に分け，第 1 期（1945-54 年）を「サークル揺籃期」，第 2 期（1955-64 年）を「サークル開花期」，第 3 期（1965-74 年）を「つきあいの多元化へ」とそれぞれ性格づけを行なった。そして，第 1 期には「敗戦」，第 2 期には「高度成長期」，第 3 期には「ポスト高度成長期」という時代状況が「刻印」されているとする。本稿は，第 3 期のサークル運動についてのケーススタディーということになる。天野がいう「多元化」した「つきあい」のひとつを明らかにする。

2）　「山本明さんの略歴」関西共同印刷所社内報「とりで」編集委員会『とりで』第 100 号，関西共同印刷所社内報「とりで」編集委員会，1977 年 6 月 15 日。引用は，山本愼一「山本明紹介」12 頁。なお引用に際しては基本的に旧字体から新字体にあらため，改行は／で，引用者による補足は〔〕であらわした。以下，特記しない限り同じ。

3）　なお「協議会」とは，職場や学校，地域などのつながりに依拠して散在している個別の「単位サークルの上部に位置」した「単位サークルの集合体」のことである（成田龍一「「サークル運動」の時代 —— 一九五〇年代・「日本」の文化の場所」河西英道ほか編『ローカルヒストリーからグローバルヒストリーへ —— 多文化の歴史学と地域史』（岩田書院，2005 年）247 頁）。したがって，協議会の資料を見ることによって，ある地域におけるサークル運動の一般的な動向を把握することができる。

4）「山本明コレクション」のなかの映画『若者たち』関係資料は，以下の一覧表のとおりである。「年月日」は，基本的に各資料の本文に記載されているものだが，それよりも正確な制作時期や発行時期が推定可能な場合はそちらを採用した。また記載がないものも他の資料の情報などから可能な限り推定した。「備考」には年月日推定の根拠，資料の性格や状態（たとえば，ハガキや切り抜きなど）についての情報を主に記した。なお，表中の／は改行ではなく，たとえば新聞でひとつの記事に複数の見出しが付いているような場合に，それらを区切るために用いている。

| No. | 制作者，発行 | 表　題 | 掲載媒体 | 巻号 | 年月日 | 資料番号 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | 共感よぶフジテレビ『若者たち』 | 赤旗 | 5581 | 1966 年 4 月 3 日 | 212-06-0061 | 新聞切り抜き。 |
| 2 | | フジテレビ「若者たち」『さよなら』の放送中止 | 赤旗 | | 1966 年 10 月 2 日 | 212-06-0066 | 新聞切り抜き。 |
| 3 | なし | 『若者たち』新星映画社で映画化 | 赤旗 | | 1967 年 2 月 26 日 | 212-06-0073 | 新聞切り抜き。紙名，年月日は書き込みによる。 |
| 4 | 滝沢一 | 茶の間評論 | | | 1967 年 9, 10 月頃 | 212-02-0011 | 新聞切り抜きコピー。掲載紙は不明。年月は「〔『若者たち』が〕完成して約半年」という記述から推定。 |
| 5 | 映画「若者たち」全国配給上映委員会 | 映画　若者たち　特別有料試写会へのおさそい | | | 1967 年 10 月 | 211-07-0118 | チラシ。「十一月〔十二月の間違いか〕三日四日新朝日ビルホール」という書き込みあり。 |
| 6 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 第 24 回常任委員会案内 | | | 1967 年 10 月 11 日 | 211-02-0128 | 紙片。 |
| 7 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 第 25 回（臨時）常任委員会案内 | | | 1967 年 10 月 21 日 | 211-02-0129 | 紙片。 |
| 8 | 映画「若者たち」全国配給上映委員会 | 若者たち | | | 1967 年 10 月 | 211-07-0119 | プレスシート。 |
| 9 | 映画「若者たち」全国配給上映委員会 | 若者たち | | | 1967 年 10 月 | 212-02-0007 | 211-07-0119 と同じ資料。 |
| 10 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 第 26 回常任委員会案内 | | | 1967 年 11 月 8 日 | 211-02-0130 | 2 部。ハガキと「日本ベトナム友好協会に入会しよう」の裏紙とに同様の内容が記載。 |
| 11 | 全大阪映画サークル協議会 | 事務局ニュース | | | 1967 年 11 月 11 日 | 211-06-0091 | 紙片。 |
| 12 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 247 | 1967 年 11 月 20 日 | 210-01-0228 | 機関紙。 |
| 13 | | 荷風の「腕くらべ」を劇化　花と競う岡田，左ら /「若者たち」新しい青春映画　テレビドラマを再構成 | 神戸新聞 | | 1967 年 11 月 28 日 | 212-06-0091 | 新聞切り抜き。 |
| 14 | 劇団俳優座，新星映画社，月の輪映画 | 映画『若者たち』普及のためのおねがい | | | 1967 年 12 月 3, 4 日 | 210-06-0084 | 紙片。年月日は「この映画が製作されて以来 8ヶ月」，「今回の有料試写」，「2 月 11 日・18 日午前中を，今一度有料試写としまして」という記述から推定。 |
| 15 | 秋吉光夫 | 映画「若者たち」が公開されて | 赤旗 | | 1967 年 12 月 17 日 | 212-06-0096 | 新聞切り抜き。紙名と年月日は書き込みによる。 |
| 16 | 映画「若者たち」全国配給上映委員会 | 若者たち | | | 1967-68 年 | 211-07-0121 | 表面はポスター，裏面に映画の説明。月日は不明だが，映画についての説明文に『毎日新聞』の映画コンクール受賞などの情報が書かれていないため，上映運動初期のものと思われる。 |
| 17 | 映画「若者たち」全国配給上映委員会 | 若者たち | | | 1967-68 年 | 500-01-0081 | ポスター。年月日は不明だが，タイトルの下に「森川時久監督第 1 回映画作品」とあるため，上映運動初期のものと思われる。 |
| 18 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 248 | 1968 年 1 月 1 日 | 210-01-0229 | 機関紙。 |
| 19 | | 新春公開 ドレイ工場と若者たち | 赤旗 | 6214 | 1968 年 1 月 1 日 | 212-06-0771 | 新聞切り抜き。 |
| 20 | 神戸映画サークル協議会 | 若者たち　神戸公開成功のために | | | 1968 年 | 212-01-0132 | チラシ。月日は不明だが，「すでに，公開にふみきった東京，名古屋，大阪」，「神戸でも 2 月 3 日の特別有料試写会を出発点に，国際会館で行なわれる 5 月（2 週間程度を予定）の一般公開をめざして」という記述があることから，1968 年初頭のものと思われる。 |
| 21 | 映画“若者たち”西日本配給事務所 | 映画“若者たち”団体鑑賞の御案内 | | | 1968 年 | 212-01-0133 | 紙片。「昨年 11 月 20 日付をもって，御案内申し上げました頭書“若者たち”の試写会は〔中略〕盛会のうちに終ることができました」，「当大阪に於きましても〔中略〕ロードショウ決行のはこびとなりました」という記述があることから，1968 年初頭のものと思われる。 |

| No. | 制作者，発行 | 表　題 | 掲載媒体 | 巻号 | 年月日 | 資料番号 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 22 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち　上映ニュース | | 1 | 1968 年 1 月 10 日 | 212-02-0010 | 機関誌。 |
| 23 | 全大阪映画サークル協議会 | 第 28 回常任委員会・案内 | | | 1968 年 1 月 17 日 | 211-02-0131 | 紙片。 |
| 24 | 全大阪映画サークル協議会 | 映画『若者たち』を普及する会　第 1 回こんだん会･案内 | | | 1968 年 1 月 20 日 | 210-06-0085 | 紙片。 |
| 25 | 神戸新聞社，ラジオ関西，神戸国際会館，月の輪映画 | 文部省選定・優秀映画鑑賞会推せん　映画「若者たち」特別試写会ご招待 | | | 1968 年 1 月 23 日 | 213-01-0176 | チラシ。「ご招待判状」付き。 |
| 26 | 全大阪映画サークル協議会 | 第 29 回常任委員会・案内 | | | 1968 年 1 月 29 日 | 211-02-0132 | 紙片。 |
| 27 | わかもの社 | わかもの | | 216 | 1968 年 2 月 1 日 | 212-02-0030 | 機関誌。 |
| 28 | 神戸映画サークル協議会 | 映画サークル | | 192 | 1968 年 2 月 1 日 | 213-01-0072 | 機関紙。 |
| 29 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 249 | 1968 年 2 月 10 日 | 210-01-0230 | 機関紙。 |
| 30 | 劇団俳優座，新星映画社，月の輪映画株式会社，全大阪映画サークル協議会 | 特別有料試写会前売券 若者たち | | | 1968 年 2 月 11 日 | 212-02-0001 | |
| 31 | 全大阪映画サークル協議会 | 特別有料試写会（第 2 次）のご案内　若者たち | | | 1968 年 2 月 11, 18 日 | 212-02-0012 | チラシ。 |
| 32 | 全大阪映画サークル協議会 | よびかけ | | | 1968 年 2 月 11, 18 日 | 210-05-0090 | チラシ。「「“若者たち”を普及する会」入会申込書」付き。年月日は「この十一日と十八日の試写会にご参加いただいたあなたの」という記述から推定。 |
| 33 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち | | | 1968 年 2 月 18 日，3 月 1-14 日 | 218-01-0048 | チラシ。アンケート付き。年月日は「今年の「毎日映画コンクール」〔『毎日新聞』1968 年 2 月 11 日で 1967 年度の受賞作と受賞者が発表された〕で脚本賞を山内久，主演男優賞を田中邦衛，助演男優賞を山本圭がそれぞれ受賞している」という記述があること，また 3 月 21 日以降の上映日程が書かれていることから，1968 年 2 月 18 日（第二次有料試写会），3 月 1-14 日（道頓堀朝日座でのロードショー）と推定。 |
| 34 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち | | | 1968 年 2 月 18，3 月 1-14 日 | 210-06-0090 | 218-01-0048 と同じ資料。 |
| 35 | | 若者たち | | | 1968 年 2 月 26 日 | 500-01-0082 | ポスター。年月日は上映開始日による。 |
| 36 | 全大阪映画サークル協議会 | 映画『若者たち』を普及する会　第 2 回こんだん会 | | | 1968 年 2 月 9 日 | 210-06-0086 | 紙片。 |
| 37 | | 特別前売鑑賞券　若者たち | | | 1968 年 3 月 21 日 | 212-02-0002 | |
| 38 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち | | | 1968 年 3 月 21 日 | 212-02-0008 | 218-01-0048 と同じ資料。 |
| 39 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 250 | 1968 年 3 月 25 日 | 210-01-0231 | 機関紙。 |
| 40 | 神戸映画サークル協議会 | 映画サークル | | 194 | 1968 年 4 月 1 日 | 213-01-0073 | 機関紙。 |
| 41 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 第 32 回常任委員会案内 | | | 1968 年 4 月 9 日 | 211-02-0133 | ハガキ。 |
| 42 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 251 | 1968 年 4 月 15 日 | 210-01-0232 | 機関紙。 |
| 43 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 第 33 回常任委員会案内 | | | 1968 年 4 月 19 日 | 211-02-0134 | ハガキ。 |
| 44 | 神奈川映画サークル協議会 | シネプレス | | | 1968 年 4 月 23 日 | 217-01-0029 | 機関紙。 |

| No. | 制作者，発行 | 表　題 | 掲載媒体 | 巻号 | 年月日 | 資料番号 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 45 | 大阪全文協事務局長 越智俊之 | 良い映画を安く！「若者たち」特別割引鑑賞券のあっせんのご案内 | | | 1968 年 5 月 1 日 | 210-06-0087 | 紙片。年月日は上映開始日による。 |
| 46 | 映画「若者たち」大阪普及事務所 | 若者たち | | | 1968 年 5 月 1 日 | 212-02-0005 | チラシ。「特別割引・窓口引換券」付き。年月日は上映開始日による。 |
| 47 | 神戸映画サークル協議会 | 映画サークル | | 195 | 1968 年 5 月 1 日 | 213-01-0074 | 機関紙。 |
| 48 | | 若者たち | | | 1968 年 5 月 1 日 | 500-01-0083 | ポスター。年月日は上映開始日による。 |
| 49 | | 話題集めるアラン・レネ監督の新作/新しい中国の“素顔”長編記録映画「夜明けの国」/八住氏を団長にモスクワへ　日ソ映画人シンポジウム | 毎日新聞（夕刊） | | 1968 年 5 月 4 日 | 212-06-0099 | 新聞切り抜き。 |
| 50 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 第 34 回常任委員会 | | | 1968 年 5 月 14 日 | 211-02-0135 | ハガキ。 |
| 51 | 月の輪映画株式会社，神戸国際会館 | 招待券　国際会館ステージ・シリーズ（第 8 回）若者たち | | | 1968 年 4 月 27 日 | 212-02-0003 | 年月日は裏面の「入場税非課税　43.4.27」という「神戸税務署」の押印による。 |
| 52 | | 全国にブームをおこしている独立プロの異色作品の神戸公開……若者たち | 神戸新聞 | | 1968 年 5 月 22 日 | 212-06-0100 | 新聞切り抜き。紙名，年月日は書き込みによる。 |
| 53 | 全大阪映画サークル協議会，月の輪映画株式会社，道頓堀朝日座 | 若者たち　試写会ご案内 | | | 1968 年 5 月 | 212-02-0004 | ハガキ。 |
| 54 | 神戸・国際会館事業部，神戸映画サークル協議会 | 若者たち | | | 1968 年 5 月 16 日 | 213-01-0174 | プレスシート。年月日は上映開始日による。 |
| 55 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 第 35 回常任委員会案内 | | | 1968 年 6 月 8 日 | 211-02-0136 | ハガキ。 |
| 56 | | 第 36 回常任委員会案内 | | | 1968 年 6 月 25 日 | 211-02-0137 | 紙片。 |
| 57 | 神戸映画サークル協議会 | 映画サークル 入会あんない | | | 1968 年 | 213-01-0001 | チラシ。「入会申込書」付き。月日は不明だが，「『ドレイ工場』『若者たち』の自主製作品・自主上映が大成功をおさめ，その第二作が準備されつつあります。また，あらたに『祇園祭』『橋のない川』『荒木栄』などの製作運動が起こりつつあります」という記述があることから，1968 年半ばのものと思われる。 |
| 58 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 第 38 回常任委員会案内 | | | 1968 年 7 月 20 日 | 211-02-0138 | 紙片。 |
| 59 | 全尼崎労働者映画協議会 | 尼労映ニュース | | 365 | 1968 年 8 月 1 日 | 213-01-0405 | 機関紙。 |
| 60 | 岩崎昶 | 独立プロの道 | 赤旗 | 6427 | 1968 年 8 月 4 日 | 212-06-0781 | 新聞切り抜き。 |
| 61 | | 来るか 新しい“独立プロ時代” | 朝日新聞 | | 1968 年 8 月 7 日 | 212-06-0782 | 新聞切り抜き。 |
| 62 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 256 | 1968 年 9 月 1 日 | 210-01-0237 | 機関紙。 |
| 63 | | 『祇園祭』にかける情熱 | 赤旗 | 6455 | 1968 年 9 月 1 日 | 212-06-0786 | 新聞切り抜き。 |
| 64 | 吉田一男 | 映画「若者たち」をみて | 赤旗 | | 1968 年 9 月 6 日 | 212-06-0787 | 新聞切り抜き。年月日は書き込みによる。 |
| 65 | 全大阪映画サークル協議会 | 第 2 回常任委員会招請状 | | | 1968 年 9 月 26 日 | 211-02-0141 | 紙片，ハガキ，チラシをホチキス留め。年月日は紙片による。 |
| 66 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 257 | 1968 年 10 月 1 日 | 210-01-0238 | 機関紙。 |
| 67 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 257 | 1968 年 10 月 1 日 | 210-06-0006 | 機関紙切り抜きコピー。 |

| No. | 制作者，発行 | 表　題 | 掲載媒体 | 巻号 | 年月日 | 資料番号 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 68 | 「若者たち」をみる会 | “若者たち”の尼崎上映を成功させよう | | | 1968 年 10 月 1 日 | 213-01-0439 | 紙片。 |
| 69 | 若者たち上映実行委員会 | 会議通知及要請 | | | 1968 年 10 月 | 213-01-0435 | 年は「十月十一日」に尼崎での『若者たち』上映に向けての会合を開く旨の通知であるため 1968 年と思われる。 |
| 70 | 林冬子 | 独立プロ運動に期待する | 赤旗 | 6486 | 1968 年 10 月 3 日 | 212-06-0795 | 新聞切り抜き。 |
| 71 | 尼崎　若者たち上映実行委員会 | 若者たち上映実行委ニュース | | 1 | 1968 年 10 月 7 日 | 212-01-0131 | 機関紙。 |
| 72 | 尼崎　若者たち上映実行委員会 | 若者たち上映実行委ニュース | | 1 | 1968 年 10 月 7 日 | 213-01-0451 | 212-01-0131 と同じ資料。 |
| 73 | | 撮影すすむ「橋のない川」 | 朝日新聞(夕刊) | | 1968 年 10 月 12 日 | 212-06-0111 | 新聞切り抜き。紙名と年月日は書き込みによる。 |
| 74 | 全尼崎労働者映画協議会 | 尼労映ニュース | | 368 | 1968 年 11 月 1 日 | 213-01-0408 | 機関紙。 |
| 75 | | 祇園祭　全国一せいにロードショー | 赤旗 | | 1968 年 11 月 27 日 | 212-06-0812 | 新聞切り抜き。 |
| 76 | 若者たちの会 | 映画若者たちの和歌山公開をのぞむ多くのみなさんに呼びかけます。 | | | 1968 年 11 月 | 217-01-0039 | 紙片。「和歌山若者たちの会加入申込書」付き。 |
| 77 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち | | | 1968 年 12 月 3 日 | 211-07-0120 | プレスシート。年月日は上映開始日。 |
| 78 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち | | | 1968 年 12 月 3 日 | 212-02-0006 | 211-07-0120 と同じ資料。 |
| 79 | 神戸映画サークル協議会 | 映画サークル | | 203 | 1969 年 1 月 1 日 | 213-01-0077 | 機関紙。 |
| 80 | K | 今月の映画雑誌 | 赤旗 | | 1969 年 1 月 17 日 | 212-06-0832 | 新聞切り抜き。紙名と年月日は書き込みによる。 |
| 81 | 全大阪映画サークル協議会 | 全大阪映画サークル協議会創立 20 周年にさいして | | | 1969 年 2 月 1 日 | 211-02-0154 | 4 部。紙片をホチキス留め。 |
| 82 | | 特別割引鑑賞券 キューバの恋人 | | | 1969 年 2 月 27 日 | 210-06-0059 | 年月日は裏面の「入場税非課税　44.2.27」という「北税務署」の押印による。『若者たち』が同時上映作品。 |
| 83 | | 特別割引鑑賞券 キューバの恋人 | | | 1969 年 2 月 27 日 | 211-07-0066 | 210-06-0059 と同じ資料。 |
| 84 | | 特別割引鑑賞券 キューバの恋人 | | | 1969 年 2 月 27 日 | 211-07-0067 | 年月日は「税務署」の「入場税検印　44.2.27」という押印による。『若者たち』が同時上映作品。 |
| 85 | | 特別割引鑑賞券 キューバの恋人 | | | 1969 年 2 月 27 日 | 212-05-0029 | 211-07-0067 と同じ資料。 |
| 86 | 大阪労音・全大阪映画サークル協議会，月の輪映画株式会社，劇団俳優座・新星映画社 | 若者たち | | | 1969 年 3 月 1 日 | 211-07-0122 | チラシ。年月日は上映開始日による。 |
| 87 | 大阪労音・全大阪映画サークル協議会，月の輪映画株式会社，劇団俳優座・新星映画社 | 若者たち | | | 1969 年 3 月 1 日 | 212-02-0009 | 211-07-0122 と同じ資料。 |
| 88 | | 松竹系で「橋のない川」系列館独占の一角くずれる | 朝日新聞(夕刊) | | 1969 年 3 月 | 212-06-1122 | 新聞切り抜き。年月日は「松竹は十九日，関西七直営館で来月十日から「橋のない川」（ほるぶ映画社製作）を上映することを決めた」，「「橋のない川」はすでに二月一日から全国のホールなどで公開されてきたが」，「東日本では「若者はゆく」を上映することが今月上旬に決定しており，五月十日から二週間の予定で直営館で公開」という記述から推定。また「1969.2.1 公開」（『橋のない川』公開日）という書き込みあり。 |
| 89 | | 映画の民主的発展をめざして　日本映画復興会議 | 赤旗 | | 1969 年 3 月 3 日 | 212-06-0868 | 新聞切り抜き。 |

| No. | 制作者，発行 | 表　題 | 掲載媒体 | 巻号 | 年月日 | 資料番号 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 90 | 山内久 | 『若者は行(ママ)く』のことなど | 赤旗 | | 1969 年 3 月 9 日 | 212-06-0869 | 新聞切り抜き。 |
| 91 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 号外 | 1969 年 3 月 15 日 | 210-01-0243 | 機関紙。 |
| 92 | 「キューバの恋人」大阪普及事務所 | キューバの恋人 | | | 1969 年 | 211-07-0063 | チラシ。月日は不明だが，『キューバの恋人』（1969 年公開）の「大阪ロードショウ（第 2 次）」（4, 5 月）の告知があるため，それよりも前のものと思われる。『若者たち』が同時上映作品。 |
| 93 | | キューバの恋人/若者たち | | | 1969 年 4 月 6 日 | 500-01-0090 | ポスター。年月日は上映開始日による。 |
| 94 | | 好評だった『若者たち』の続編『若者はゆく』が完成 | 赤旗 | 6690 | 1969 年 4 月 27 日 | 212-06-0901 | 新聞切り抜き。 |
| 95 | 映画「若者たち」全国上映委員会西日本事務所 | 続・若者たち　若者はゆく | | | 1969 年 | 211-07-0125 | チラシ。月日は不明だが，『続・若者たち　若者はゆく』（1969 年公開）の「6 月上旬特別ロードショウ」の告知があるため，それよりも前のものと思われる。『若者たち』が同時上映作品。 |
| 96 | 映画「若者たち」全国上映委員会西日本事務所 | 続・若者たち　若者はゆく | | | 1969 年 | 212-02-0017 | 211-07-0125 と同じ資料。 |
| 97 | G | 映画館の支配人 野上さんの生活と意見 | 赤旗 | | 1969 年 5 月 1 日 | 212-06-0904 | 新聞切り抜き。 |
| 98 | | 新局面迎えた独立プロ映画　松竹系劇場で上映いいチャンスぜひ成功させたい | 新関西 | | 1969 年 5 月 2 日 | 212-06-0906 | 新聞切り抜き。紙名は書き込みより。 |
| 99 | 橋本功 | 橋本功　幕あい ぼくの“次郎” | | 6695 | 1969 年 5 月 2 日 | 212-06-0908 | 新聞切り抜き。掲載紙不明。 |
| 100 | | 独立プロ作品(ママ)洋画館で上映「若者がゆく」と「人間の条件」 | 朝日新聞（夕刊） | | 1969 年 5 月 10 日 | 212-06-0910 | 新聞切り抜き。年月日は書き込みより。 |
| 101 | 山田和夫 | 『若者はゆく』一斉公開 | 赤旗 | | 1969 年 5 月 11 日 | 212-06-0912 | 新聞切り抜き。 |
| 102 | 佐藤忠夫(ママ) | 著作者の権利奪う著作権法　五社しのぐ独立プロ | | | 1969 年 5 月 14 日 | 212-06-0911 | 新聞切り抜き。掲載紙不明。 |
| 103 | 玄間記者 | 森川時久監督　若者を語る | 赤旗 | | 1969 年 5 月 20 日 | 212-06-0915 | 新聞切り抜き。 |
| 104 | | 若者はゆく | 赤旗 | | 1969 年 5 月 22 日 | 212-06-0917 | 新聞切り抜き。紙名，年月日は書き込みによる。 |
| 105 | 玄間記者 | 『まだまだ新人ですよ』“三十年選手”の原保美さん | 赤旗 | | 1969 年 5 月 23 日 | 212-06-0918 | 新聞切り抜き。 |
| 106 | | 若者はゆく | | | 1969 年 5 月 30 日 | 212-06-0925 | 新聞切り抜き。掲載紙不明。年月日は書き込みによる。『若者たち』が同時上映作品。 |
| 107 | 岡本博 | 映像時評 | 毎日新聞（夕刊） | | 1969 年 5 月 30 日 | 212-06-1133 | 新聞切り抜き。 |
| 108 | | 現代の若者の苦悩まざまざ「若者はゆく」特別試写を見て | 神戸新聞（夕刊） | | 1969 年 6 月 7 日 | 212-06-0928 | 新聞切り抜き。 |
| 109 | 〔神奈川映画サークル協議会〕事務局次長・吉村重雄，〔北九州映画サークル協議会〕事務局長・川畑輝繁 | 映画サークルからの報告 全国労映総会を終えて | 赤旗 | | 1969 年 6 月 7 日 | 212-06-0933 | 新聞切り抜き。 |
| 110 | | いい映画がみたい 第七回日本映画復興会議に出席して | 赤旗 | 6731 | 1969 年 6 月 8 日 | 212-06-0930 | 新聞切り抜き。 |
| 111 | | 感動さす同世代観 | 毎日新聞（夕刊） | | 1969 年 6 月 18 日 | 212-06-0937 | 新聞切り抜き。 |

| No. | 制作者，発行 | 表　題 | 掲載媒体 | 巻号 | 年月日 | 資料番号 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 112 | 山本亘，木村夏江，大久保昭，関根謙，橋本きよみ，永井幸子，玄間太郎 | 若者の生き方を語る　下映画『若者たち』『若者はゆく』『ひとりっ子』を中心に | 赤旗 | 6741 | 1969年6月18日 | 212-06-0938 | 新聞切り抜き。 |
| 113 | 岩崎昶 | いい映画のつくれる条件つくれない条件 | | | 1969年7月6日 | 212-06-0946 | 新聞切り抜き。掲載紙不明。年月日は書き込みによる。 |
| 114 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 264 | 1969年7月10日 | 210-01-0246 | 機関紙。 |
| 115 | 映画“若者たち”全国上映委員会　西日本事務所 | 映画若者たち若者はゆく第2次ロードショウのごあんない | | | 1969年7月19日 | 210-06-0089 | 紙片。年月日は上映開始日による。 |
| 116 | | 続・若者たち　若者はゆく | | | 1969年7月19日 | 211-07-0124 | チラシ。年月日は上映開始日による。 |
| 117 | | 続・若者たち　若者はゆく | | | 1969年7月19日 | 212-02-0020 | 211-07-0124と同じ資料。 |
| 118 | 全大阪映画サークル協議会 | 第16回常任委員会案内 | | | 1969年7月24日 | 211-02-0151 | ハガキ。 |
| 119 | 大島渚，篠田正浩，吉田喜重 | 日本映画の現状語る 上限界に来た五社系列 | 神戸新聞 | | 1969年8月15日 | 212-06-0498 | 新聞切り抜き。紙名，年月日は書き込みによる。 |
| 120 | 大島渚，黒木和雄 | 日本映画を変える大島渚対談3　黒木和雄 | 朝日新聞 | | 1969年8月7日 | 212-06-0503 | 新聞切り抜き。 |
| 121 | | 断絶’69 1 黒木プロ事件配給路線で対立　キューバの恋人理想破れ封鎖騒ぎ | 朝日新聞(夕刊) | | 1969年12月18日 | 212-06-0371 | 新聞切り抜き。年月日は書き込みによる。 |
| 122 | シナリオ作家・今崎暁巳 | 第七回『放研集会』をふりかえって（下） | 赤旗 | | 1969年12月21日 | 212-06-0146 | 新聞切り抜き。紙名，年月日は書き込みによる。 |
| 123 | 調布市・田村聡子 | 交流「若者はゆく」製作に拍手贈る | 赤旗 | | 1969年 | 212-06-0964 | 新聞切り抜き。月日は不明。「1969.5.10公開」（『若者はゆく』公開日）という書き込みあり。 |
| 124 | | 佐藤オリエ「若者たち」で清新なイメージ決定 | 朝日新聞 | | 1970年2月15日 | 212-06-1024 | 新聞切り抜き。 |
| 125 | | 日本の映画界はどうなる？ | 赤旗 | 6980 | 1970年2月15日 | 212-06-1025 | 新聞切り抜き。 |
| 126 | 映画創造問題研究会 | 第一回映画創造問題研究会御案内 | | | 1970年2月21日 | 212-01-0166 | 紙片。 |
| 127 | | 若者たち/続・若者たち若者はゆく | | | 1970年3月10日 | 212-02-0029 | チラシ。年月日は上映開始日による。 |
| 128 | 俳優座映画放送株式会社，映画「若者たち」上映委員会 | 私たちは三たび若者たちの旗をかかげます | | | 1970年4月10日 | 212-02-0022 | チラシ。 |
| 129 | 映画「若者たち」全国上映委員会 | 若者たち | | 1 | 1970年4月20日 | 210-02-0001 | 機関紙。 |
| 130 | 映画「若者たち」全国上映委員会 | 若者たち | | 4 | 1970年6月5日 | 210-02-0004 | 機関紙。 |
| 131 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち/若者はゆく/ひとりっ子 | | | 1970年6月 | 212-02-0028 | チラシ。 |
| 132 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち/若者はゆく/ひとりっ子 | | | 1970年6月 | 218-01-0127 | 212-02-0028と同じ資料。 |
| 133 | 映画「若者たち」全国上映委員会 | 若者たち | | 6 | 1970年7月5日 | 210-02-0006 | 機関紙。 |
| 134 | | 日本映画復興会議第八回総会ひらく | 赤旗 | | 1970年7月15日 | 212-06-0177 | 新聞切り抜き。年月日は書き込みによる。 |
| 135 | 映画「若者たち」全国上映委員会 | 若者たち | | 7 | 1970年7月20日 | 210-02-0007 | 機関紙。 |
| 136 | 映画「若者たち」全国上映委員会 | 若者たち | | 8 | 1970年8月5日 | 210-02-0008 | 機関紙。 |
| 137 | 山田和夫 | 原爆を描いた作品　映画 | 赤旗 | 7154 | 1970年8月9日 | 212-06-0380 | 新聞切り抜き。 |
| 138 | 映画「若者たち」全国上映委員会 | 若者たち | | 9 | 1970年8月20日 | 210-02-0009 | 機関紙。 |

| No. | 制作者，発行 | 表　題 | 掲載媒体 | 巻号 | 年月日 | 資料番号 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 139 | 長谷川豊 | 戦前，戦後の映画検閲 | 赤旗 | 7167 | 1970 年 8 月 22 日 | 212-06-0202 | 新聞切り抜き。 |
| 140 | 全大阪映画サークル協議会 | 若者たち/若者はゆく/ひとりっ子 | | | 1970 年 8 月 22 日 | 500-01-0103 | ポスター。年月日は上映開始日による。 |
| 141 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 278 | 1970 年 9 月 8 日 | 210-01-0260 | 機関紙。 |
| 142 | | 映画『若者の旗』完成 どう生きるかを問いかける | 赤旗 | 7258 | 1970 年 11 月 22 日 | 212-06-0249 | 新聞切り抜き。 |
| 143 | 根本悌二 | “あたりまえのこと”のために 映画労働者が映画をすきになる努力について | 赤旗 | 7260 | 1970 年 11 月 24 日 | 212-06-0252 | 新聞切り抜き。 |
| 144 | | シリーズ最後の『若者の旗』脚本の山内久ら神戸で語る | 神戸新聞（夕刊） | | 1970 年 11 月 26 日 | 212-06-0253 | 新聞切り抜き。 |
| 145 | | 顔　佐藤オリエ ほしい精神の豊かさ | 神戸新聞 | | 1970 年 11 月 29 日 | 212-06-0254 | 新聞切り抜き。 |
| 146 | 全大阪映画サークル協議会委員長　山本明 | 常任委員会案内 | | | 1971 年 1 月 | 211-02-0161 | 紙片。重複 2 部。 |
| 147 | 映画「若者たち」全国上映委員会 | 若者たち | | 23 | 1971 年 3 月 30 日 | 210-02-0021 | 機関紙。 |
| 148 | 全大阪映画サークル協議会 | 大阪映画サークル | | 300 | 1972 年 7 月 1 日 | 210-01-0280 | 機関紙。 |
| 149 | 石子順 | さいきんの青春映画　若者はなぜうつむいて歩くのか | 赤旗 | | 1974 年 4 月 12 日 | 212-06-1102 | 新聞切り抜き。 |
| 150 | 山形雄策 | 一九七五年の映画センター運動 | | | 1975 年 1 月 15 日 | 212-01-0160 | 切り抜きコピー。掲載媒体不明。 |
| 151 | 南部僑一郎 | 検閲は生きている「映画検閲秘話」を終えて | 赤旗 | | | 212-06-1131 | 新聞切り抜き。年月日不明。 |

5）　サークル運動の研究史については，宇野田尚哉ほか編『「サークルの時代」を読む ―― 戦後文化運動研究への招待』（影書房，2016 年）を参照。

6）　成田前掲「「サークル運動」の時代」247 頁。

7）　ただし，映画と近接する映像メディアである幻灯については，鷲谷花による一連の研究が存在する。たとえば，「幻灯と戦後サークル文化運動」宇野田編前掲『「サークルの時代」を読む』や「スクリーンの「ニコヨン」たち ―― 失業対策事業日雇労働者の映像文化史」『映像学』第 102 号，2019 年 7 月など。また最近，矢野勝敏編『戦後文化史「宮崎映画サークルの時代」―― 一九五〇年代のドキュメント』（鉱脈社，2020 年）という資料集も出版された。

8）　佐藤洋「映画を語り合う自由を求めて ―― 映画観客運動史のために」黒沢清ほか編『日本映画は生きている 3 ―― 観る人，作る人，掛ける人』（岩波書店，2010 年）25 頁。

9）　同上，28 頁。

10）　同上，32 頁。

11）　同上，33 頁。

12）　成田前掲「「サークル運動」の時代」260 頁。

13）　佐藤卓己『現代メディア史　新版』（岩波書店，2018 年）198 頁。

14）　山本昭宏『戦後民主主義 ―― 現代日本を創った思想と文化』（中央公論新社，2021 年）の「あとがき」には，「戦後民主主義と聞いて何をイメージするかは人それぞれだろうが，筆者は『若者たち』という作品を思い浮かべる」という記述がある。その理由のひとつは，悩める登場

人物たちが「濃密な人間関係」を展開するストーリーであり，いまひとつは「〔『若者たち』が〕独立プロ作品であり製作から配給まで，自主性や集団性を重視して」いることである（同上，285 頁）。山本が示唆している，戦後史と『若者たち』との接点を具体的に明らかにしていくことも，本論文の目的である。

15）佐藤正之「我等の生涯の最良の映画 5 ―― 観客の熱意に支えられた「若者たち」」『キネマ旬報』第 887 号，1984 年 6 月，145 頁。

16）佐藤忠男『日本映画史 3 ―― 1960-1995』（岩波書店，1995 年）90 頁。

17）小玉美意子「メディアの中の年代とジェンダー」武蔵大学公開講座ワーキング・グループ編『武蔵大学公開講座 ―― ライフスタイル考現学』（御茶の水書房，2001 年）14 頁。

18）佐藤前掲「我等の生涯の最良の映画 5」145 頁。

19）同上。

20）同上。

21）同上，146 頁。

22）同上，147 頁。

23）「共感よぶフジテレビ『若者たち』」『赤旗』1966 年 4 月 3 日，「山本明コレクション」212-06-0061。「フジテレビ「若者たち」『さよなら』の放送中止」『赤旗』1966 年 10 月 2 日，「山本明コレクション」212-06-0066。「『若者たち』新星映画社で映画化」『赤旗』1967 年 2 月 26 日，「山本明コレクション」212-06-0073。

24）山本明「第 24 回常任委員会案内」全大阪映画サークル協議会，1967 年 10 月 11 日，「山本明コレクション」211-02-0128。

25）山本明「第 25 回（臨時）常任委員会案内」全大阪映画サークル協議会，1967 年 10 月 21 日，「山本明コレクション」211-02-0129。

26）福間良明『「勤労青年」の教養文化史』（岩波書店，2020 年）第 1-2 章。

27）実際，各学校の「校長先生」宛の団体鑑賞の案内も行なわれていたようである（映画“若者たち”西日本配給事務所「映画“若者たち”団体鑑賞の御案内」映画“若者たち”西日本配給事務所，1969 年，「山本明コレクション」212-01-0133）。

28）全大阪映画サークル協議会『大阪映画サークル』第 248 号，全大阪映画サークル協議会，1968 年 1 月 1 日，「山本明コレクション」210-01-0229。

29）全大阪映画サークル協議会「第 28 回常任委員会・案内」全大阪映画サークル協議会，1968 年 1 月 17 日，「山本明コレクション」211-02-0131。

30）四方田犬彦『日本映画史 110 年』（集英社，2014 年）184-185 頁。

31）北浦寛之『テレビ成長期の日本映画 ―― メディア間交渉のなかのドラマ』（名古屋大学出版会，2018 年）132 頁。

32）全大阪映画サークル協議会『大阪映画サークル』第 249 号，全大阪映画サークル協議会，1968 年 2 月 10 日，「山本明コレクション」210-01-0230。

33）全大阪映画サークル協議会『大阪映画サークル』第 250 号，全大阪映画サークル協議会，1968 年 3 月 25 日，「山本明コレクション」210-01-0231。

34）全大阪映画サークル協議会『大阪映画サークル』第 257 号，全大阪映画サークル協議会，1968 年 10 月 1 日，「山本明コレクション」210-01-0238。

35）北川鉄夫編『日本の独立プロ』（映画「若者たち」全国上映委員会，1970 年）163 頁。

36）映画「若者たち」全国配給上映委員会『若者たち』1967 年 10 月，「山本明コレクション」

211-07-0119。

37） 戦前から戦後にかけての岩崎の思想については，花田史彦「社会を変える映画論の射程 ―― 映画評論家・岩崎昶の「大衆」観を中心に」『マス・コミュニケーション研究』第 92 号，2018 年 1 月も参照されたい。

38） 映画「若者たち」全国配給上映委員会前掲『若者たち』，「山本明コレクション」211-07-0119。

39） 同上。

40） 滝沢一「茶の間評論」掲載紙不明，1967 年 9-10 月頃，「山本明コレクション」212-02-0011。

41） 花田史彦「「民主主義」から「戦後主義」へ ―― 映画『青い山脈』（一九四九年）をめぐる輿論と世論」『京都メディア史研究年報』創刊号，2015 年 4 月，59-62 頁。

42） なお『大阪映画サークル』にも，「〔『若者たち』が〕建設的なイイ映画だということは，誰の目にも明らかである。映画会社もそれが分っているなら「マジメ映画は売れない」「キャストが弱い」「組合せるもう一本を選ぶのがむづかしい」などというのは男気なしの臆病者としかいいようがない。石坂洋次郎原作の，万事都合よくいく青春ものしかしらないのか」（全大阪映画サークル協議会前掲『大阪映画サークル』第 248 号，「山本明コレクション」210-01-0229）という声もあり，石坂洋次郎作品との対比で『若者たち』について論じる観客の声が見られた。石坂作品と『若者たち』という対比は，当時それなりに一般的なものであったのかもれない。

43） 『若者たち』は 15 位であった（『キネマ旬報ベスト・テン 90 回全史 ―― 1924 → 2016』（キネマ旬報社，2017 年）242 頁）。

44） 全大阪映画サークル協議会前掲『大阪映画サークル』第 249 号，「山本明コレクション」210-01-0230。

45） 畑あゆみ「『圧殺の森』再考 ―― 60 年代末記録映画における身体と言葉の相克とリアリズム」『JunCture ―― 超域的日本文化研究』第 1 号，2010 年 1 月，182 頁。

46） 同上，184 頁。

47） ただし，『若者たち』は毎日新聞社主催の映画コンクール（第 22 回，1967 年度）で入賞している。同作がコンクールへの「参加作品」に選ばれたことは，『毎日新聞』1967 年 12 月 29 日で確認できる。1968 年 2 月 10 日には選考と表彰式が行なわれ，田中邦衛が男優主演賞，山本圭が男優助演賞，山内久が脚本賞をそれぞれ受賞している（『毎日新聞』1968 年 2 月 11 日）。したがって『大阪映画サークル』が強調するほど，映画ジャーナリズムと『若者たち』とが隔絶していたわけではないと言えるだろう。

48） 小熊英二『1968 上 ―― 若者たちの叛乱とその背景』（新曜社，2009 年）234-235 頁。

49） 「感動さす同世代観」『毎日新聞』1969 年 6 月 18 日，「山本明コレクション」212-06-0937。

50） 全大阪映画サークル協議会前掲『大阪映画サークル』第 248 号，「山本明コレクション」210-01-0229。

51） 佐藤忠男「スクリーン労働者論 64 ―― 生きることの真剣な模索「若者たち」の再上映運動」『月刊総評』1983 年 11 月号，93 頁。

52） こうした幅の広さは，たとえば『若者たち』と同年に蜷川虎三知事のもと京都府政 100 年を記念した『祇園祭』（山内鉄也監督，1968 年公開）にも認めることができる（高木博志「近現代史のなかの映画『祇園祭』 ―― もう一つの明治百年」谷川建司編『映画産業史の転換点 ―― 経営・継承・メディア戦略』（森話社，2020 年））。

53） 佐藤卓己『青年の主張 ―― まなざしのメディア史』（河出書房新社，2017 年）170 頁。

54） 全大阪映画サークル協議会「第 32 回常任委員会案内」全大阪映画サークル協議会，1968 年 4

月 9 日,「山本明コレクション」211-02-0133。全大阪映画サークル協議会「第 33 回常任委員会案内」全大阪映画サークル協議会，1968 年 4 月 19 日,「山本明コレクション」211-02-0134。全大阪映画サークル協議会「第 34 回常任委員会案内」全大阪映画サークル協議会，1968 年 5 月 14 日,「山本明コレクション」211-02-0135。全大阪映画サークル協議会「第 35 回常任委員会案内」全大阪映画サークル協議会，1968 年 6 月 8 日,「山本明コレクション」211-02-0136。無署名「第 36 回常任委員会案内」，1968 年 6 月 25 日,「山本明コレクション」211-02-0137。山本明「第 38 回常任委員会案内」，1968 年 7 月 20 日,「山本明コレクション」211-02-0138。全大阪映画サークル協議会「第 2 回常任委員会招請状」，1968 年 9 月 26 日,「山本明コレクション」211-02-0141。全大阪映画サークル協議会「第 16 回常任委員会案内」全大阪映画サークル協議会，1969 年 7 月 24 日,「山本明コレクション」211-02-0151。全大阪映画サークル協議会「全大阪映画サークル協議会創立 20 周年にさいして」全大阪映画サークル協議会，1969 年 2 月 1 日,「山本明コレクション」211-02-0154。山本明「常任委員会案内」全大阪映画サークル協議会，1971 年 1 月,「山本明コレクション」211-02-0161。

55）「対談　森川時久×杉田成道 ――「若者たち」が今突きつけるもの」『キネマ旬報』第 1258 号，1998 年 6 月，163 頁。

56）福間良明『「働く青年」と教養の戦後史 ――「人生雑誌」と読者のゆくえ』（筑摩書房，2017 年）84-89 頁。

57）津軽十三『長編小説　若者はゆく』（文理書院，1969 年）。山内久・立原りゅう『長編小説若者の旗』（文理書院，1970 年）。

## 要　旨

本論文は，「山本明コレクション」（京都大学人文科学研究所所蔵）を用い，映画『若者たち』（森川時久監督，1968 年公開）の流通と受容を跡づけることを目的とする。

『若者たち』はこれまでメディア研究の領域において，高度成長期の「経済優先」的な風潮への反発を象徴する作品とされてきた。たしかにそうした表象分析は成立するが，同作を特徴づける自主上映の実態については十分に明らかになっていない。

「山本明コレクション」の特徴のひとつは，『若者たち』に関連したローカルな資料が多数存在することだ。たとえば，同作の特集を組んだ大阪のサークル紙や上映会のチラシなどである。そこで本論文ではこうした資料を用い，大阪における『若者たち』上映活動の実態を解明し，ポスト高度成長期のサークル文化運動の性格を考察した。


**キーワード**：映画『若者たち』，サークル文化運動，ポスト高度成長期，山本明，大阪


## Summary

The main aim of this paper is to trace the circulation and reception of the film “Wakamonotachi（The Young People）”（Morikawa Tokihisa, 1968）in the period of post Economic growth in Japan, using the Yamamoto Akira Collection.

The film has been regarded as a work that symbolizes the rebellion against the “economic priority” trend during the period of high economic growth.

While such representational analysis exists, the actual situation of the independent screenings that characterize this film is not sufficiently clear.

One of the distinctive features of the Yamamoto Akira Collection is the large number of local materials related to “Wakamonotachi”. For example, there are a number of local papers of the circle newspaper that featured the film in Osaka, as well as leaflets of the screening of the film.

This thesis analyzes these materials to clarify the actual situation of the screening activities of “Wakamonotachi” in Osaka and considers the nature of the circle culture movement in the post-high growth period.


**Keywords**: “Wakamonotachi（The Young People）”, cultural movement, Post High Economic Growth, Yamamoto Akira, Osaka